

図書館 (Library) という空間

尾上 選哉 教授
(会計学・国際会計論)

仕事柄であるか、どうかわからないが、図書館という空間が気に入っている。図書館の建物前の広場やスペース、入口、ロビー、秩序整然と並んだ本棚、地下奥深くにある書庫、同じ背表紙に製本された雑誌、大きな学習机や個人用機のならぶ閲覧スペース。図書館を訪れる人が思い思いの時間を過ごすところ。

小学校時代の図書館は、図書室ではなく、まさに図書館であった。教室などの建物から渡り廊下でつながった、木造平屋の図書館だった。お気に入りは『シートン動物記』、『15少年漂流記』等の冒険もの、また偉人たちの伝記の類いであったが、この頃の記憶は図書館掃除で、ほうきなどを振り回しながら遊んだ記憶の方が鮮明に残っているのだが。

大学院に入学して、初めて地下にある書庫という特別なスペースに足を踏み入れた。大きな電動の書架が置かれ、どのようにその電動書架を動かせばよいか戸惑ったのを覚えている。このような地下の書庫には多くの人はおらず、自分たった一人ということも少なくない。図書館という空間が何となく好きになったのは、この頃からだと思う。

米国に留学した時の図書館も忘れられない。映画では一場面としてよく見ていたが、真夜中まで学生が図書館にこもり、思い思いの時間を過ごしている。書架の前に座り込んでいる書籍を一新に読みふけている人もいれば、大きな書籍をテーブルいっぱいにはたげ、黙々と勉強している人も。自分もそんな一人になりたいくて、レポート課題の資料収集のために、また定期試験のために、図書館に通った時代がなつかしい。当時は、E-mailが少しずつ使われ始めた時代で、もちろん今のようなインターネットで、世界中の資料を検索して、閲覧できるような時代ではなかった。図書館に行かなければ、情報が手に入らなかったのだ。

留学後、帰国して大学院の博士後期課程に進学。まさにそれ以来、図書館という空間は自分の仕事場の延長線上にある大事なところとなっている。また、空間だけでなく、図書館で働く司書の方々には大変お世話になってきた。資料の探し方から始まり、資料の複写依頼や取り寄せなど。相談すれば、親身になって、私の目当ての資料を探してくれた。感謝でいっぱいだ。

2年前に研究調査で New York City を訪れる機会があった。その際に訪問した図書館が忘れられない。The New York Public Library (ニューヨーク公共図書館) である。図書館の名称に「Public」という文字があるが、州立や市立の図書館ではなく、民間の非営利組織 (NPO) である The New York Public Library, Astor, Lenox and Tilden Foundations という財団法人によって運営されている「Private (私立)」の図書館である。New York City の中に 92 の本館・分館があるが、本館はマンハッタンにあるブライアント・パーク内、マンハッタンのど真ん中である。本館建物もゴザール様式の建築物として有名であるが、圧巻は閲覧室である。



仕事から離れても、こんな図書館に通うことができれば、どんなに人生は Happy なのだろうかと思った瞬間であった。New York City を訪問する際には、是非、足を伸ばして欲しい場所である。ちなみに、映画「Ex Libris: The New York Public Library (邦題: ニューヨーク公共図書館エクス・リブリス)」にもなっているので、コロナ禍の中、ゆっくりと映画鑑賞するのもいいかもしれない。